

優秀賞

## 親切の種

静岡県 可美小学校 四年  
荒川 美和

「学校も友達も大好きなのに、学校に行きたくないな。」

私は2年生のとき、とても辛いことがあって、学校に行きたくなくなりました。毎日泣いていた。登校前は心がザワザワして、教室の前では足が重たくなりました。お母さんやスクールカウンセラーの先生に相談したけれど、やっぱり心は辛いままだった。何をしても不安で、心が重たいままだ。どんどん自分に自信がなくなって、ちがう自分になってしまった。

そんなとき、となりのクラスの友達が、私の様子を見ていつも心配してくれた。私は、その子が心配してくれているのは知っていたけれど、今の辛い気持ちを話す勇気はなかった。

ある日、自由帳にすてきな言葉を書いて、やぶって私にくれた。大切な自由帳なのに、私のためにやぶってくれたことにおどろいた。かわいいレターセットで書かれたお手紙もいいけれど、そのお手紙は特別で、すごくうれしかった。お手紙には、

『いつも元気でいようね』と書かれていた。

そして、また別の日には、ぬり絵といっしょに、

『一年生のときは、助けてくれてありがとう。次は、わたしが助けてあげるからね』と、力強く書かれていた。

私は友達にお手紙をもらって、辛くなくなったわけではないけれど、元気がもらえた。自分のことを心配してくれる友達がいること、クラスがちがっても気にかけてくれたことがうれしくて、心がポカポカした。

それに友達が、私が1年生のときにした小さな親切を覚えていてくれたことが、何よりうれしかった。

その友達は、給食が苦手で泣いてしまうことがあった。私は少しでも給食が好きになるように、はげまし続けた。私はわすれかけていたけれど、友達はわすれずにいてくれた。

小さな親切は、大きな親切になって私のところに帰ってきた。私が一番こまっているときに。自分が気づいていないだけで、心から心配してくれる相手がたくさんいることに気づいた。このことが、私に勇気をくれた。たよれる相手は、すぐそばにいるのだ。

私はこのけいけんを、いやな思い出として終わらせず、こまっている人を助ける親切に変えていきたい。人の辛さがわかった分、親切を大切に、友達と関わっていきたいと思った。

小さな親切で、だれかの悲しみをすくうかもしれない。私は、そんなさりげない親切ができる人でいたい。

辛いけいけんは、きつとこの先もある。けれど、一人じゃないんだと思うと心強い。そして、勇気はあるけれど、助けをもとめて良いということがわかった。そのことをまわりになやんでいる人がいたら、そっと伝えたいと思う。

「あなたは一人じゃないよ。」